

『武器よさらば』と二人の作家

—— クレインとスタンダール ——

日 下 洋 右

A Farewell to Arms and Two Authors: Crane and Stendhal
Yosuke KUSAKA

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) は『武器のさらば』(*A Farewell to Arms*) (1929) の構想段階で、イタリアの山岳地帯を舞台に繰り広げられた1809年のナポレオン戦争と、この小説の背景となった1917年のイタリア戦線の状況との著しい類似性に気づいていたにちがいない。というのも、この小説には主人公フレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) 中尉が、イタリアを舞台に展開された二つの戦争の戦略を比較している場面がみられるからである。

Napoleon would have whipped the Austrians on the plains. He never would have fought them in the mountains. He would have them come down and whipped them around Verona.¹

この場面で主人公は目下のイタリア軍の戦術と百年ほど昔のナポレオン (Napoleon) の戦術とを対比して、イタリア軍の作戦を批判しているのである。主人公がナポレオンの戦術との比較からイタリア軍の戦術を洞察した場面は、作者が一連のナポレオン戦争に精通していることをうかがわせる。この場面のナポレオン戦争との関係から特に注目される点は、ナポレオン戦争に幾度か従軍した経験をもつが、『パルムの僧院』(*The Charterhouse of Parma*) (1839) でしかその体験を具体化しなかったスタンダール (Stendhal) とヘミングウェイとの関係が想起されることである。

事実、リリアン・ロス (Lillian Ross) とのインタビューの中で、ヘミングウェイは “I started out very quiet and I beat Mr. Turgenev. Then I trained hard and I beat Mr. de Maupassant. I’ve fought two draws with Mr. Stendhal, and I think I had an edge in the last one.”² と語って、彼の目標であり競争相手でもあった偉大な作家たちを挙げているが、この発言は中でもスタンダールを特に意識していたことをうかがわせる。ヘミングウェイの狩猟旅行記『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*) (1935) の中で、ヘミングウェイは独自の文学論や作家論を卒直に披瀝している。対話形式を借りて語られる作家論の中では、アメリカ作家としてマーク・トウェイン (Mark Twain)、ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)、スティーヴン・クレイン (Stephen Crane) が明らかに評価されている。³ 海外の作家の中では、ナポレオン軍に加わって転戦したスタンダール、フランス革命を体験したフローベール (Flaubert)、クリミア戦争や露土戦争に従軍したトルストイ (Tolstoy)、革命に連座してシベリアに流刑されたドストエフスキー (Dostoevsky) などの戦争や革命を生きぬいた作家たちが重視されている。⁴

以上の事実だけからみても、外国作家のうちスタンダールとヘミングウェイとの結びつきの強いことがみえてこよう。二人の関係の深さが決定的に明らかにされるのは、ヘミングウェイが自ら編集した戦争文学選集『戦う男たち』(*Men at War*) (1942) に、ユゴー (Hugo) やキップリング (Kipling) などの作品と並んでスタンダールの『パルムの僧院』を採録していることである。また、この

選集では、『アフリカの緑の丘』で展開されている作家論の中で評価の高いアメリカ作家の一人とされたクレインが重視されている。というのも、ヘミングウェイはその選集にクレインのすぐれた戦争小説『赤色武勲章』(*The Red Badge of Courage*) (1895)を全編所収しているからである。編者は『戦う男たち』の中に自らの代表作の一つ『武器よさらば』をも収録しているので、この戦争文学選集では、彼の戦争小説と『パルムの僧院』及び『赤色武勲章』とを並置して、読者にその比較を求めているかのようである。こうして、ヘミングウェイは自己とクレインやスタンダールとの密接な関係、さらには『武器よさらば』と『赤色武勲章』及び『パルムの僧院』との類縁関係を自ら認めているのである。しかし、ヘミングウェイと二人の作家との文学上の血縁関係が暴露されていたにもかかわらず、マイケル・レノルズ(Michael Reynolds)以外に、この点を検討して裏づけようと試みた研究者が一人もいなかったのは不思議なことである。レノルズはその著『ヘミングウェイの最初の戦争——「武器よさらば」の成立』(*Hemingway's First War : The Making of "A Farewell to Arms"*) (1976)の中で、『武器よさらば』とクレイン及びスタンダールの小説との比較研究を入念に試みている。

レノルズは『武器よさらば』が作者の戦争体験から書かれたのではなく、様々な参考資料を利用して書かれたことを解明し、どのような関係資料が用いられたのかを詳細に検討して、この小説をいわば研究小説と位置づけている。レノルズは『武器よさらば』の執筆中に使用された数多くの研究資料の一部としてまた手法の手本の一つとして、スタンダールやクレインの小説が利用されたことを裏づけようとしている。しかし、研究されたとと思われる資料の大部分は利用目的が明確にされて、レノルズの研究目標がほぼ達成されているが、『パルムの僧院』と『赤色武勲章』が『武器よさらば』の中でなぜ利用されねばならなかったのか、その理由は必ずしも明確にされていない。『武器よさらば』を戦争小説の傑作の一つにしたカポレットの退却を中心としたイタリア戦線の状況と、『赤色武勲章』の主人公が名誉の負傷をする戦闘シーンや『パルムの僧院』のワートルローの戦闘や敗走場面との類似点が比較検討されているのみで、著しい類似点が多い理由と、『武器よさらば』に二編の名作が利用された目的とは必ずしも解明されているとはいえない。本論ではクレインの小説の臆病者が勇者に豹変する戦場でのエピソードと『武器よさらば』の前線でのエピソードとの共通点や、スタンダールの小説の名場面ワートルローの戦いと『武器よさらば』のカポレットの退却場面の共通場面を再検討して、類似点が余りに多い理由とその目的を明らかにする。

『アフリカの緑の丘』が出版されてから7年後、ヘミングウェイは戦争文学選集『戦う男たち』を編集したが、その中に『武器よさらば』からカポレットの退却場面を、『パルムの僧院』からワートルローの戦いの場面を、そして『赤色武勲章』の全編を収載している。ヘミングウェイが『パルムの僧院』をどれほど評価していたかは、戦争文学選集の序文で端的に語られている。というのは、序文の中でヘミングウェイは、一連のナポレオン戦争に従軍して、戦争体験が豊富なスタンダールならではの描けないワートルローの戦いのダイナミックで、迫真性に満ち、リアスティックで、綿密な描写に最大限の賛辞を呈しているからである。⁵

The best account of actual human beings behaving during a world shaking event is Stendhal's picture of young Fabrizio at the battle of Waterloo. That account is more like war and less like the nonsense written about it than any other writing could possibly be. Once you have read it you will have been at the battle of Waterloo and nothing can ever take that experience from you. You will have to read Victor Hugo's account of the same battle. . . to find out what you saw there as you rode with the boy; but you will have actually seen the field of Waterloo already whether you understood it or not. You will have seen a small piece

of war as closely and as clearly with Stendhal as any man has ever written of it. It is the classic account of a routed army. . . Stendhal served with Napoleon and saw some of the greatest battles of the world. But all he ever wrote about war is the one long passage from *La Chartreuse de Parme*.⁶

『パルムの僧院』で描かれているワーテルローでナポレオン軍が敗走した場面も、『武器よさらば』で描かれているイタリア軍がカポレットから悲惨な撤退をした場面も、限定された視点と範囲とから戦争の災禍を描き出しているが、その部分的な描写は各々の小説の全体を要約している。ヘミングウェイは単にすぐれた戦争小説を集めようと意図して、クレインやスタンダールの作品を戦争小説集に収録したのではなさそうである。作者はこれらの戦争文学の名作と『武器よさらば』との対比を読者に求めたかのようである。特に、イタリア軍が崩壊したカポレットの退却とナポレオン軍が連合軍に敗れて潰走したワーテルローの戦いには類似点がきわめて多く、作者は二つの名場面を競わせているかのようである。

『赤色武勲章』と『パルムの僧院』にヘミングウェイがどれほど傾倒していたかは、『武器よさらば』の主人公の命名にも如実に表われている。登場人物名も、これら二編の小説を抜きにしては考えられないからである。『武器よさらば』の執筆当初、名前が変更された人物は九名にも及んでいる。例えば、ヒロインのキャサリン(Catherine)も草稿段階ではフランシス(Frances)とされていたが、それがキャサリン(Katherine)に変更され、修正草稿ではKがCに変えられて落ち着いたのである。一方、主人公兼語り手のフレデリック・ヘンリーの氏名は、一度も変更された形跡がない。これは、物語の構想段階から主人公の名前がすでに確定されていたことを意味していよう。主人公の命名過程の点からも、『パルムの僧院』と『赤色武勲章』は絶えず作者の念頭に置かれていた事実が浮かび上がってくる。

『赤色武勲章』の主人公名、『パルムの僧院』の作者名とその本名、そして『武器よさらば』の主人公名の関連性を考察すると、三者間の興味深いつながりが発見される。スタンダールは本名をアンリー・ベイル(Henri Beyle)、筆名をフレデリック・スタンダール(Frederic Stendhal)といった。この点から、『武器よさらば』の主人公フレデリック・ヘンリーのフレデリックは、フレデリック・スタンダールのフレデリックに由来するかもしれない。ヘンリーはスタンダールの本名アンリー・ベイルのアンリーに由来する可能性がある。あるいは、『赤色武勲章』の主人公ヘンリー・フレミング(Henry Fleming)のヘンリーから採った可能性も捨て切れない。主人公名の命名の点からみただけでも、『武器よさらば』がクレインとスタンダールの傑作の影響を受けていることは間違いなさそうである。従って、『戦う男たち』の中で『武器よさらば』とこれらの戦争小説が並置された裏には、重要な意味や意図が潜められているとみてよい。そうだとすれば、『赤色武勲章』と『パルムの僧院』が注目されて、それらの戦争小説と『武器よさらば』との比較研究が行われて当然なのだが、なぜかレノルズの研究を除けば、それが試みられた形跡は認められない。

ヘミングウェイとクレインやスタンダールとの文学上の類縁関係が指摘されていたにもかかわらず、レノルズ以外にこの関連性を分析し検討した批評家は一人も見当たらないとすれば、ヘミングウェイとの関係からクレインやスタンダールがどのように扱われていたのかを考察することも興味深いことである。カーロス・ベイカー(Carlos Baker)はヘミングウェイが修業時代に学んだ作家として、ツルゲーネフ(Turgenev)、チェホフ(Chekhov)、トルストイ、ドストエフスキー、バルザック(Balzac)、フローベール、W. H. ハドソン(Hudson)、マーク・トウェイン、スティーヴン・クレイン、ヘンリー・ジェイムズ、ジョゼフ・コンラッド(Joseph Conrad)、ジェイムズ・ジョイス(James Joyce)、トーマス・マン(Thomas Mann)をあげて話題にしているが、ヘミングウェイと

こうした作家たちとの影響関係を論じてはいない。また、ペイカーは『アフリカの緑の丘』の第一部と第二部で、ヘミングウェイが対話形式を通じて論じているクレインやスタンダールを含めた作家たちをも取り上げているが、ヘミングウェイの作品と彼らの作品との比較研究を実践してはいない。⁷

クレインやスタンダールに言及しているヘミングウェイ研究者は、ペイカーのように『アフリカの緑の丘』の中で展開されているヘミングウェイの作家論を引用するか、繰り返しているにすぎず、アフリカの狩猟記で話題にのぼっている作家とヘミングウェイとの影響関係には全く関心の目を向けていない。アール・ロヴィット(Earl Rovit)は、『アフリカの緑の丘』の中でヘミングウェイがトウエイン、ジェイムズ、クレインをすぐれた作家として認めていることを紹介しているにすぎない。また、ロヴィットはヘミングウェイに影響を与えた芸術家として、イギリス、アメリカ、フランス、そしてロシアの文人たちに加えて、バッハ、モーツァルトなどの音楽家、ゴヤ、セザンヌ、ゴッホなどの画家、それに神秘主義者を列挙するだけで終わっている。⁸

リーオ・グアコー(Leo Gurko)もヘミングウェイが『アフリカの緑の丘』の中でトウエイン、ジェイムズ、クレインを賞賛している点と、“All modern American literature comes from one book by Mark Twain called *Huckleberry Finn*. . .”⁹ という余りに有名なヘミングウェイの発言とを単に紹介しているだけである。また、グアコーはヘミングウェイが『アフリカの緑の丘』の第二部第二章で、トルストイ、ドストエフスキー、フローベール、スタンダールなどのように、戦争や革命や流刑などの体験からすぐれた文学が生みだされたと語っている点を紹介しているにすぎない。¹⁰

しかし、フィリップ・ヤング(Philip Young)は、『アフリカの緑の丘』の中で語られているヘミングウェイの文学論や作家論を紹介することだけで満足してはいない。第一に、狩猟記の中でヘミングウェイはトウエイン、ジェイムズ、クレインを賞賛しているが、彼がこのような先達を賞揚している理由をヤングはみごとに解明しているからである。ジェイムズは構文の複雑な長い文章を好んで書く作家であり、単調で簡潔な文章を構築するヘミングウェイとは相容れないため、ジェイムズとヘミングウェイとの結びつきは一見奇異に思われるかもしれない。しかし、ヘミングウェイが評価するのは、ジェイムズの文章作法そのものでない。ヘミングウェイがジェイムズを評価するのは、“... a sense of discipline, a command of form and structure, a devotion to the craft of prose fiction and a high seriousness in its practice”¹¹ といったジェイムズの作家としての姿勢に共感しているためである、とヤングは見抜いている。

第二に、ヤングはクレインの文学史上の存在について、他の研究者とは全く異なった見解を示しているからである。『ハuckleベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*) (1884)とヘミングウェイの諸作品との関係については、このトウエインの小説に対するヘミングウェイの名言のために、ヤングをはじめ多くの研究者が言及している。特に、ヤングは一章をさいてこの点を詳細に分析し解明している。¹² しかし、クレインの文学とヘミングウェイの文学との接点については、クレインが小説の手法の面でヘミングウェイに影響を与えたといわれる点を除けば、ヘミングウェイ批評家からほとんど注目されていない。ヤングは一步踏みこんで、クレインの文学史上の役割や地位そしてクレインとヘミングウェイとの関係について独自の論を展開している。トウエインとヘミングウェイをつなぐ文学史上の系譜には一世代が抜けており、その空白を埋める二人の作家の中間に位置する作家がクレインであるとヤングは主張し、ヘミングウェイとクレインの生き方、作品の手法、臆病と勇気の問題を追求する姿勢などの共通点を詳細に検討している。¹³ ただ、『武器よさらば』と『赤色武勲章』との関係では、Crane's soldier-protagonist is named Henry, and he resembles in several ways a lieutenant who went by that name.¹⁴ としか言及されていず、いささか拍子抜けの感じがする。それ以上に、スタンダールや『バルムの僧院』に一言も触れられてい

いのは、意外な印象を与える。

ワート・ウィリアムズ(Wirt Williams)は、ヘミングウェイに影響を与えた作家として、ペイカーとヤングが指摘した文人たちをそのまま引用している。『パルムの僧院』については、カポレットの退却場面がすぐれていることを理解するには、『パルムの僧院』で描かれているワートルローの敗走シーンと比較すればよいと述べて、スタンダールの小説に触れているにすぎない。¹⁵ スコット・ドナルドソン(Scott Donaldson)は、『武器よさらば』の中で脱腸帯をつけた兵士が故意に負傷する場面を、クレインの『赤色武勲章』の借りものであると簡単に言及しているだけである。¹⁶ レイモンド・S・ネルソン(Raymond S. Nelson)は、『赤色武勲章』が写真や戦記物や歴史書などを利用して南北戦争を研究した作者によって書かれた想像の産物にすぎないとする、ヘミングウェイの指摘を単に繰り返しているにすぎない。¹⁷ レノルズの研究書が出版されてからは、バーナード・オールドセイ(Bernard Oldsey)のように、カポレットからイタリア軍が潰走するシーンは、クレインの『赤色武勲章』やゾラ(Zola)の『壊滅』(*La Débâcle*) (1892)と同様、戦闘を目撃も体験もしなかった作者が徹底的に調査研究して書いたものと主張して、¹⁸ レノルズの研究成果を踏まえた批評家がみられる。しかし、レノルズの業績を乗り越えるほどの斬新なすぐれた研究はまだ出現していない。

ヘミングウェイは『武器よさらば』の中心的な出来事としてイタリア戦線を利用しようとした時、イタリア軍が大勝した局面を採り入れることもできたはずである。それにもかかわらず、作者はなぜイタリア軍が25万5千余の捕虜を出して敗走した、イタリア史上最も屈辱的な大事件であるカポレットの退却を選択したのであろうか。それは、主要登場人物の悲劇を盛り上げるのに、カポレットでイタリア第二軍が大崩壊し、35万の兵士と40万の非戦闘員を巻きこんで退却した第一次大戦で最も悲劇的な出来事の一つを、物語のクライマックスとして設定することが最も効果的であると認識されたからである。この物語で描かれるフレデリック・ヘンリー中尉とミラノのアメリカ赤十字病院看護婦キャサリンの悲劇は勝利とは全く異質であり、惨憺たる敗北こそが男女の悲劇を深化させ、愛と死というテーマと戦争というテーマとを緊密に結びつけるのである。

従って、主人公を負傷させる必要があったために挿入せざるをえなかった、プラーヴァを舞台にした短期の交戦場面を除けば、作者はイタリア軍が前線を突破され、カポレットから悲惨な撤退をする局面以外に軍事状況を直接描く必要がなかったのである。しかし、ヘミングウェイは赤十字傷病兵運搬車隊の操縦兵として自ら体験した1918年の戦況ではなく、カポレットの退却という未経験な17年の戦況を描くことになった時、知識の不足している面が多々あることに気づき、各種の関係資料を研究したのである。作者は資料の一つとしてスタンダールの小説をどのように利用したのであろうか。作者はスタンダールの『パルムの僧院』の描写の中に、後に『戦う男たち』の序文で語った以上のものを見出していたのである。というのも、作者はカポレットの退却の執筆段階で、当時の軍事状況や地理的状况などに関する知識以外に、退却のために混雑した本街道を離れて脇道を辿るなどの兵士の行動様式に関する認識不足を、スタンダールの小説から示唆を受けて補ったと思われるからである。その点を知るには、『パルムの僧院』のファブリツィオ(Fabrizio)と『武器よさらば』のフレデリック・ヘンリー中尉が戦争に巻きこまれた経緯や、二人の行動様式や、二人を取り巻く地理的状况を綿密に比較検討してみる必要がある。

『パルムの僧院』と『武器よさらば』との主人公の間には、多少例外はあるものの類似点が数多くみられる。ファブリツィオは一兵卒としてナポレオン軍に加わり、ワートルローで戦うことになったまだ17歳の純粋無垢で、戦争については全く無知な少年である。一方、フレデリック・ヘンリーは建築学の修学のためにイタリアへ留学中であったことから明らかなように、ナポレオン軍の兵卒より年長で純粋無垢ではないどころか、傷病兵運搬車隊の将校として従軍し、軍事上の知識が豊富以上に、軍隊内部の情報にも通じている点では、一見ファブリツィオとは著しく異なった人物に見

える。しかし、『武器よさらば』の第三部のイタリア軍の敗北場面で描かれるフレデリック・ヘンリーの体験は、ファブリツィオの体験と驚くほど似通っている。

ファブリツィオもフレデリック・ヘンリーも、自ら志願して入隊した外国人である。ファブリツィオは理想に燃えてナポレオン軍に加わったイタリア人であり、フレデリック・ヘンリーは留学生としてイタリアに滞在中、当時のイデオロギーに共鳴してイタリア軍へ入隊を志願したアメリカ人である。両者とも国の命運を分けるきわめて重大な戦いに巻きこまれ、結果的には共に戦いに敗れて敗走することになる。二人とも所属する部隊を離れ、本街道が退却中の兵士や民間人や各種の車輛でひしめいている状況を見て、脇道に入り田野を突っ切ろうとする。ファブリツィオもフレデリック・ヘンリーも、言葉づかいに外国語訛りがあるため自己の正体が暴露されそうになる。それどころか、ファブリツィオはイタリア語の訛りのあるフランス語を話すため、敵のスパイではないかと再三疑われる。事実、フレデリック・ヘンリーが従軍したイタリア戦線の場合と同様、ワーテルローの戦闘でも敵方がかなりの人数のスパイを送りこんでいるので、フランス語を流暢に話せないファブリツィオもスパイの嫌疑をかけられて一度は投獄される。フレデリック・ヘンリーもイタリア語に訛りがあるため、タリアメント川にかかる橋のたもとで憲兵からドイツ軍の潜入スパイではないかと疑われて捕えられる。その結果、両者とも敵側のスパイと見誤まれて、スイスという中立地帯へ逃亡する。

ナポレオン軍がワーテルローの戦いに敗れて退却する途中、ファブリツィオはヘンリー中尉が体験する状況と似たような状況に巻きこまれる。中尉とその部下は撤収の準備を整え、ゴリツィアから三台の病院車に分乗して、タリアメント川の向こう側の目的地ポルデノーネへ向けて退却する。最初、ゴリツィアからウーディネまでの本街道では、部隊やトラックや荷馬車や砲車が縦列をなして、ゆっくりではあるが止まることなく動いていたが、やがて立往生してしまう。縦列は数時間を経て数ヤード進むとまた止まるという動き方を繰り返していたが、やがて完全に動きを止めてしまう。中尉の一隊は本街道から脇道にそって畑地を突っ切って行こうと試み、三台の病院車は生垣の間の狭い道を辿る。

ゴリツィアとウーディネの間にヘンリー中尉たちが渋滞に直面するように、『パルムの僧院』のオーブリ (Aubry) 伍長とファブリツィオ一行も、退却する部隊や民間人や車両で混雑しているため町の中の本道を進むことができない。

. . . All the streets were jammed with infantry, with cavalry, and, worst of all, with gun-carriages and wagons belonging to the artillery. The corporal made his way to the top of three of the streets; after walking twenty paces he had to stop. Everyone was swearing and getting out of temper.

. . . Fabrizio looked round him; there were only six men left with the corporal. Through a big gate that stood open they passed into a huge courtyard; from this yard they made their way into a stable, the back door of which gave them entry into a garden. They lost their way there for a moment and wandered blindly round and round. But at last, after getting through a hedge, they found themselves in a huge field of buckwheat. In under half an hour, guided by the shouts and a medley of noises, they had come out again upon the high road beyond the village. The ditches along this road were filled with muskets that had been thrown down there; Fabrizio selected one of these. But the road, although very broad, was so encumbered with soldiers in flight and baggage-wagons that in the next half-hour the corporal and fabrizio had barely advanced five hundred paces. . .¹⁹

この場面はヘンリー中尉一行が巻きこまれたゴリツィアとウーディネ間の退却の混乱状態の描写に酷似している。

マスケット銃が道路端の溝に多量に遺棄された光景は、『武器よさらば』の中で退却中の兵士たちが“Viva la Pace!”. . . “We’re going home!”²⁰と叫びながら、銃を捨てている有様を想起させる。大混乱している大通りを進めないで、オーブリ伍長がファブリツィオと他の部下三名を連れてソバ畑を突っ切る場面は、ヘンリー中尉が時間を節約するために部下たちに側道を進ませることと比較できる。伍長は脇道を進んでいる途中に、広いソバ畑の中央を貫流する用水路に沿って繁っている樹々の下へ一行を引き連れて行き、パンを五名で分け合い、食べ終わると彼らは夜が明ける少し前まで仮眠する。その間にも、本街道からは退却軍の騒音が急流の水音のようにひっきりなしに聞こえてくる。ヘンリー中尉の一隊も脇道にそれて、畑を突き進んでいる途中にぶつかる遺棄された農家の中を探し回って、チーズ、ブドウ酒、そしてリングを見つけ出し、分け合って食べる。また、アイモ(Aimo)が味方のイタリア軍の後衛兵に射殺されてから、ヘンリー中尉たちは日中隠れられる場所を探している最中に、一軒の放棄された農家を見つけ、そこで探し出した食料を分け合って食べてからしばらく眠って休息する。それから、彼らは町を北へ通り抜けてしばらく行き、退却軍の本隊と合流して夜通しタリアメント川を目指して歩く。

ファブリツィオは軍隊から脱走して、民間人になりすますように仲間から勧められる。“Get right away from this mess of a defeated army. Clear off, take the first fairly beaten track that you meet with to the right; spur on your horse, and go on getting as far as you can from the army. At the first opportunity, buy yourself some civvies . . . Never let anyone know that you’ve been in the army, or the gendarmes will pick you up as a deserter. . . .”²¹ ファブリツィオは逃亡中に、同じナポレオン軍側の敗走中の兵士と争って負傷し、やっとのことでゾンデルの町の旅籠へ辿りつくが、出血による衰弱のため床についてしまう。敵の士官が脱走兵のことをかぎつけて、旅籠へ探索にやってくる。ファブリツィオは自己の逮捕が近いものと判断して、平服を一揃い買い求め、それを身につけて逃亡を続ける。

負傷する点を除けば、この過程もヘンリー中尉の体験と符合する。中尉も敗走軍から脱走し、民間人の服に着替えて逃亡する。タリアメント川にかかる橋のたもとで憲兵たちは、部隊を離れた少佐以上の将校と、イタリア軍の軍服を着て偽装したドイツ軍の潜入者を捕えては訊問し処刑している。中尉はイタリア語に外国語訛りがあるため、潜入ドイツ兵と決めつけられて捕まり、訊問を受けそうになった瞬間にタリアメント川へ飛びこんで逃亡し、貨物列車に潜んでミラノへ辿りつく。ミラノでは、彼は留学生仲間から背広を借りて民間人を装う。彼はミラノからキャサリンの移動先ストレーザへ赴くが、そこへも警察の手がのびてくる。警察はヘンリーがイタリア軍の将校であったことに気づいており、脱走して民間人になりすましていることを見抜いているからである。最終的には、ファブリツィオもフレデリック・ヘンリーも、無事スイスへ逃げのびる。スイスでは、二人とも口実を使って自分たちの素性を隠してしまう。

ヘミングウェイは『戦う男たち』の序文の中で、スタンダールに賛辞を呈したように、ステイーヴン・クレインにも賞賛の言葉を捧げているが、それはクレインの文学の手法に向けられたものであった。

Crane wrote [*The Red Badge of Courage*] before he had ever seen any war. But he had read contemporary accounts, had heard the old soldiers, they were not so old then, talk, and above all he had seen Matthew Brady’s wonderful photographs. Creating his story out of this material he wrote that great boy’s dream of war that was to be truer to how war is than any

war the boy who wrote it would ever live to see. It is one of the finest books in our literature and I include it entire because it is all as much of one piece as a great poem is.²²

ヘミングウェイは『武器よさらば』の執筆に取り組んでいた1928年の時期までには、クレインが『赤色武勲章』と格闘する際に用いた方法を既に知悉していたにちがいない。この経緯に関しては、レノルズの推論が説得力を帯びている。

1924年にヘミングウェイは『トランスアトランティック・レビュー』(*Transatlantic Review*)誌の編集に携わり、フォード・マドックス・フォード(Ford Madox Ford)のもとで副主筆を務めたことがあったので、フォードを通してクレインという人物とその文学の特質を知り及ぶことになった、とレノルズはみている。レノルズによれば、フォードはクレインがイギリスのサセックス州ビードに邸宅を借りて住んでいた時期に彼と知り合い、後にフォードはこのアメリカの青年作家について著述したり講演したりしたので、戦争小説を書くためのクレイン独特の手法を知り尽くしていたというのである。ヘミングウェイはフォードと交際していた1924年当時、彼からクレインに関する種々のエピソードは言うまでもなく、この小説作法をも幾度となく耳にしていたとみてよい。クレインの作法は関連した各種の歴史書を読み、古参兵の話を聞き、写真をみて研究した上で執筆に取り組むというものであった。これこそ、ヘミングウェイが賞賛するに至ったクレインの戦争小説を書くための方法であり、『武器よさらば』を書くために自ら実践した手法でもあった。

『武器よさらば』が語り手兼主人公の戦争と愛の回想物語であるように、『赤色武勲章』も南北戦争に北軍の一兵卒として参加し、戦場で臆病者から勇敢な男に豹変した場面を回想した物語である。フレデリック・ヘンリーが彼の愛する国イタリアを護るためイタリア軍へ入隊を志願したように、ヘンリー・フレミングも新聞報道や村の噂などから北軍の優勢な戦況を知って愛国心が揺り動かされ、母親の心配や反対にもかかわらず、近くの町で編成された中隊に応募して入隊する。しかし、フレミングは実際に戦場へきてみると、実戦に早く臨みたいという戦友たちの勇み立つ気持ちとは対照的に、戦闘に出会えば逃亡するのではないかという疑念にとりつかれ、それが日ごとに強まってくる。臆病風に吹かれるのは、それが戦場では最も恥ずべきことなので、そうした心中を人前で口外すべきことでないにもかかわらず、“Think any of the boys'll run?”²³あるいは“Did you ever think you might run yourself, Jim?”²⁴などと、彼が仲間に執拗に尋ねまわることにも如実に表われている。

フレミングの属する連隊が戦闘地区に到着し、いざ敵軍と対峙して射撃を交えると、先程まで勇気を誇示していた隣の兵士が突然真っ青になって逃亡するので、震えながらも銃を発射していたフレミングも、銃を捨てて部署を放棄し、脱兎のごとく前線から逃げ出す。彼は前線の背後の道をうろついているうちに、臆病に取りつかれたもう一人の脱走兵と出会い、呼びとめようとする、その男に小銃の台尻で頭をなぐられて傷を受けてしまう。皮肉なことに、この傷がフレミングの武勲章となる。フレミングは連隊に戻ると、この額の傷が名誉の負傷と受け取られて戦友たちの祝福を受けるからである。

『武器よさらば』の第七章にも、クレインの小説の主人公が頭部を負傷する場面を彷彿させるシーンが描かれている。フレデリック・ヘンリー中尉は傷病兵運搬車に傷病兵を乗せて仮収容所から病院へ運ぶ途中、ゴリツィアの戦闘区の後方を走る埃っぽい道路端で、落伍者の最後尾を足を引きずりながらやってくる一人の兵士を見つけて運搬車に収容する。落伍したイタリア系アメリカ人は、前線へ戻らなくてもすむようにと、脱腸帯を捨てて以前から患っていたヘルニアを悪化させようとしていたのである。しかし、慢性のヘルニアでは応急診療所へ連れていっても手当てが受けられないため、同情したヘンリー中尉は少し思案してから、“You get out and fall down by the road and

get a bump on your head and I'll pick you up on our way back and take you to a hospital. We'll stop by the road here, Aldo.”²⁵ と援助の手を差しのべる。

しかし、中尉が二か所の病院へ負傷兵を引き渡し、落伍者が待つ現場へすぐ引き返してみると、この志願兵は落伍者を収容して回っていた所属連隊の傷病兵運搬車に発見され、再び前線へ連れ戻されようとしているところである。He shook his head at me. His helmet was off and his forehead was bleeding below the hair line. His nose was skinned and there was dust on the bloody patch and dust in his hair.²⁶ フレミングと同じように、この志願兵も頭部に打撲による出血の跡を残したまま所属の連隊へ戻すが、フレミングが「赤いしるし」のお蔭で勇敢な男として賞賛されるのに対して、彼はその傷を勇気のしるしとしては受け取ってもらえない。

ゴリツィア方面の軍事状況や自然景観は言うまでもなく、カポレットからイタリア軍が退却した時の日程、道路状況、気象状況、敵軍の動き、それにゴリツィアからウーディネを経てタリアメント川に至る地域の地理などを、ヘミングウェイは数多くの関係資料を駆使して研究していたことが、レノルズの考察によって裏づけられている。ヘミングウェイは描写の細部を詰める際に、『赤色武勲章』と『パルムの僧院』から示唆を受けたとみてよいであろう。それにしても、既に考察したように、これらの作品と『武器よさらば』との間に類似した場面が余りに多いのはなぜなのであろうか。レノルズが示唆しているように、ヘミングウェイは作家になりたての頃、過去の偉大な作家と競って書くつもりだと語ったことがあるので、スタンダールと競うために対応する場面を故意に設定して、読者にその比較を求めたからであらうか。²⁷ また、レノルズが主張するように、クレインの作品を研究資料として利用したというより、多少なりとも小説作法の教えを受けた先輩作家に間接的に敬意を払ったためであらうか。²⁸

それは、ヘミングウェイが『赤色武勲章』や『パルムの僧院』を含めて様々な参考資料を研究しているうちに、大規模な戦闘では兵士の行動パターンに共通点の多いことに気づいたからとみるべきである。ヘミングウェイに先輩作家の傑作を利用した点があったとすれば、それは戦場の兵士、特に敗走する兵士に同じ行動様式がみられることを発見するのに役立ったことである。従って、クレインやスタンダールの戦争小説とヘミングウェイの戦争小説との間に対応する場面が目立つのは、ヘミングウェイがクレインやスタンダールの小説の同一場面を利用した結果でも、戦争を描いた過去の偉大な作家と競うためでもなかったのである。特に、ヘミングウェイが『戦う男たち』の中で、ワートルローの戦いと敗走の名場面をカポレットの退却の描写と並列したのは、共通してみられる兵士たちの思考様式や行動様式を明らかにし、これこそ戦争の現実であり、真実であることを読者に提示しようとしたのだとみるべきである。

注

- 1 Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929), p. 118.
- 2 Lillian Ross, *Portrait of Hemingway* (New York: Simon and Schuster, 1961), p. 35.
- 3 Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Charles Scribner's Sons, 1935), p. 22.
- 4 Hemingway, *Green Hills of Africa*, pp. 69-71.
- 5 スタンダールはファブリツィオと同じ17歳でナポレオン戦争に従軍し、イタリアへ遠征しているが、ワートルローの戦いには参加していない。『パルムの僧院』で描かれているワートルローの戦闘場面は、1813年5月のボーツェン戦場での作者の体験を利用しているといわれる。
- 6 Ernest Hemingway, *Men at War* (New York: Crown Publishers, 1942), p. xx.
- 7 Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (New Jersey: Princeton U.P., 1963), p. 27, pp. 175-176.
- 8 Earl Rovit, *Ernest Hemingway* (New York: Twayne Publishers, 1963), p. 167.

- 9 Hemingway, *Green Hills of Africa*, p. 22.
- 10 Leo Gurko, *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism* (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968), p. 40, pp. 212-213.
- 11 Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: The Pennsylvania State U.P., 1966), p. 188.
- 12 Young, *Ernest Hemingway*, pp. 211-241.
- 13 Young, *Ernest Hemingway*, pp. 191-198.
- 14 Young, *Ernest Hemingway*, pp. 198.
- 15 Wirt Williams, *The Tragic Art of Ernest Hemingway* (Baton Rouge: Louisiana State U.P., 1981), p. 27, pp. 84-85.
- 16 Scott Donaldson, *By Force of Will: The Life and Art of Ernest Hemingway* (New York: The Viking Press, 1977), pp. 126-127.
- 17 Raymond S. Nelson, *Hemingway: Expressionist Artist* (Ames: the Iowa State U.P., 1979), p. 15.
- 18 Bernard Oldsey, *Hemingway's Hidden Craft: The Writer of "A Farewell to Arms"* (University Park: The Pennsylvania State U.P., 1979), p. 47.
- 19 Stendhal, translated by Margaret R.B. Shaw, *The Charterhouse of Parma* (London: Penguin Books, 1958), pp. 69-70.
- 20 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p. 219.
- 21 Stendhal, *The Charterhouse of Parma*, pp. 75-76.
- 22 Hemingway, *Men at War*, p. xvii.
- 23 Stephen Crane, *The Red Badge of Courage* (New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1962), p. 12.
- 24 Crane, *The Red Badge of Courage*, p. 13.
- 25 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p. 35.
- 26 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p. 36.
- 27 In *A Farewell to Arms*, he seems to have written his Caporetto retreat in direct competition with Stendhal, and in *Men at War* he has invited the comparison by reprinting the two sections in juxtaposition. Michael S. Reynolds, *Hemingway's First War: The Making of "A Farewell to Arms"* (New Jersey: Princeton U.P., 1976), p. 158.
- 28 Here Hemingway is not so much using Crane as a source as he is paying an oblique kind of homage to writer whom he admired and from whom he learned something about writing. Reynolds, *Hemingway's First War*, p. 160.

テキスト

- Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York: Charles Scribner's Sons, 1929.
- . *Green Hills of Africa*. New York: Charles Scribner's Sons, 1935.
- . *Men at War*. New York: Crown Publishers, 1942.
- Crane, Stephen. *The Red Badge of Courage*. New York: W.W. Norton & Company, Inc., 1962.
- Stendhal. *The Charterhouse of Parma*. Trans. Margaret R. B. Shaw. London: Penguin Books, 1958.

参考文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer As Artist*. New Jersey: Princeton U.P., 1963.
- Donaldson, Scott. *By Force of Will: The Life and Art of Ernest Hemingway*. New York: The Viking Press, 1977.
- Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1968.
- Nelson, Raymond S. *Hemingway: Expressionist Artist*. Ames: The Iowa State U.P., 1979.

- Oldsey, Bernard. *Hemingway's Hidden Craft: The Writing of "A Farewell to Arms."* University Park: The Pennsylvania State U.P., 1979.
- Reynolds, Michael S. *Hemingway's First War: The Making of "A Farewell to Arms."* New Jersey: Princeton U.P., 1976.
- Ross, Lillian. *Portrait of Hemingway.* New York: Simon and Schuster, 1961.
- Rovit, Earl. *Ernest Hemingway.* New York: Twayne Publishers, 1963.
- Williams, Wirt. *The Tragic Art of Ernest Hemingway.* Baton Rouge: Louisiana State U.P., 1981.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration.* University Park: The Pennsylvania State U. P., 1966.